

インのトアルドにあるのを發見したが、ペ氏の見たミラノ本には誤寫もあることが判つて、かやうに版に附せられたのである。

既刊の第一、二巻の大體は右に述べた通りであつて、ムール氏が編纂の任に當つてゐる。

續刊の第三巻はペリオ氏が主編であつて、數篇の論文とペリオ氏の手になる記事の註釋、研究書目などが收められ、第四巻は圖版及び地圖とのことである。近年の佛・英・蘭の諸雜誌に現れる「見聞録」の註解に類するもの、乃至は蒙古時代の中央アジア、支那の歴史地理、各地の習俗に關する論文のム・ペ兩教授の筆になるものが目だつて多く、ユール・コルディエの註解の改められたものゝすくなくないことは人の知る所である。また、ユール本(G本)に見えない記事で、註解を必要とするものも甚だ多い。冒頭に述べた研究の三方面のうち第二の方面は、この第三巻によつて果してどれほど進められるか、大きな期待をもつ次第である。

この本の題名を、私はこの文の初めに見える様に、こゝろみに「世界事情」と譯してみた。原本に最も近いとされるF本の標題は *Le disamenent du monde* となつて居り、こゝろのムール・ペリオ版もそれに従つてゐる。イタリア語の通稱は *Il Milione* といふ。英語では *The Book of M. P.* であるが *Travels of M. P.* と呼び、いまで出された三種の邦譯本は、いづれも英語版からの翻譯であつたため「マルコ・ポーロ旅行記」と題されてゐた。國定教科書では「東方見聞録」といふ呼び方をしてゐる。本の内容は決してたゞの旅行記ではなく、原題の示すがごとく、その頃のア

ジアの事情について何も知らなかつた歐洲人のために、東方各地の事情をいろ／＼述べたもので、いはゞ初めて書かれた科學的な地理書ともいふべきものである。だから後者の方がいくらか實際にちかひ。

なほ本年三月の東洋史研究四ノ三拙稿「マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校註本について、補遺二則」に述べた所は本文と多少の出入があるから、同好の士の就いて見られんことを希望する。

(デイマイ・クワルト版、第一卷五九五頁、第二卷一三二頁、四五〇部限定版、價格、四册六磅六志、邦貨約百貳拾圓)(藤枝是)

ドプシユ著 社會經濟史論叢

Alfons Dopsch: Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte.

昨年、ドプシユの七十歳誕生記念を迎へてその論文集が門弟達の手によつて出版せられ此の碩學の新業績が再び吾々の書架に光彩を加へることゝなつた。著者ドプシユとその業績については今更事新しく述べるまでもないが、その主義は別として論文集としても、既に一九二八年その六十歳誕生記念として出版された *Verfassungs- und Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters* がある。本書はその續篇に當るもので、最近の十年間に書かれた論文十一篇を中心とし、他に先の二八年の論文集に洩れた「連續性の問題」、著者の「自序傳」、門弟の執筆にかゝる「自序傳補遺」が加へられてゐる。誕生記念に當り弟子達の獻作集でなくドプシユ

自身の勞作を出版することは特別な考慮に基くものであることを編纂者はその序文に銘記してゐる。

繙讀に際し先づ注意を惹くのは、卷頭の「中世初期の社會及び經濟のごとく、また「ベネフィキウムと封建制度」のごとく、殆んど獨立の著述とも見做し得るやうな完結性をもつた長篇を含むことである。即ち「論文集」であるとは云へ、本書は必ずしも世に有り勝ちな斷片の集録でない。

卷頭論文はもと和蘭ライデンの法制史雜誌の求めに應じ著者がその主著である「歐洲文化發展の基礎」及び「カロリング期經濟發展」の兩著の概要を略述せんとしたもので、その意味においては初學者がドブシュの歴史觀や中世研究の現状を概括的に理解するための手頃の入門書であるといふことができよう。然し、それよりも較る本論文は、前記二つの主著により中世研究に劃時代的轉換が起されて以來既に十數年に亙るその間の學問の進歩を反映し、またその間彼に向けられた批判に對する解答、特に最近におけるシュヴェーリン(Schwein)の法制史に對する反駁を含むといふ點において、専門家にとつてもまた看逃すことの出来ない重要文獻であるといはなくてはならぬ。

「ベネフィキウムと封建制度」も著者が既に十數年來主張しつゝ、ある新説を強化して學界におけるロート・ブルンナー説の傳統を征服せんとするものであるが、從來のドブシュ説が主として *Lehnswesen* の成立起源を中心とし封建制度の發展期に多く觸れるところがなかつたのに對し、本篇は *Lehnswesen* と *Feuda-*

lismus の異同問題にまで發展し、フォン・ベーローがその「中世獨逸國家」において *Feudalismus* の特質を主權の離脱 (*Entfremdung von Hoheitsrechten*) に求め公權の私權化、國家的秩序の解體の過程に封建制度の完成を見んとしたのに對し、ドブシュはフランク王國の國家組織の特殊性格から出發して官職の如き國家の組織的部分が個人貸借形體を通して離脱することは決して公法的秩序の分解、王權の退化縮小を意味するものでなく、反對に組織維持、王權の擁護のための當時における特殊形體である、従つて封建制度の發展は絕對に國家の消滅、公權の私權化をもたらすものでないことを論じてゐる。同じく本書に收められた「中世における獨逸國家」は之と關聯して封建期における國家の存在とその意義を明らかにしたもので短篇ではあるけれども前掲フォン・ベーローの名著と相並び此の種問題に關する重要文獻たることを喪はない。兩者共に中世獨逸における國家の存在を主張し乍らその根據において相違點のあることは注目すべきであらう。

「世界史における自然經濟と貨幣經濟」の一篇は一九二八年オースロで開かれた萬國史學大會における講演である。之は周知のごとく一九三〇年同じ標題の單行本として公刊せられ歐洲史學界の近來の傑作として正に注目せられつゝあるところのもので、本書に收められたものはその概要にすぎない。彼はこれまでの經濟史家が樹立した自然經濟及び貨幣經濟といふ抽象を排斥する。自然經濟時代、貨幣經濟時代なるものは存在しない、すべての時代が同時に自然經濟的、貨幣經濟的である。彼は既成體系における抽象

的整合を破つて事實そのもの、多様性 (Pluralitas) の上に新しき經濟史を樹立せんとする。それ故に彼は既成體系の破壊者であつても彼自身は決して體系家でないとの批評もないではないが、恐らく斯かる觀察は凡そ體系とは理論秩序でなくてはならぬと考へてゐる人々の誤解である。ドブシュは舊き抽象の代りに新しき抽象を提出せんとするのでなく抽象そのものを排斥せんとする。私は敢てドブシュを以て今世紀最大の體系的學者であると考へる。

なるほど彼の立場は既成體系に對立するものとして常に相對性をもつことは争へない。然し彼がもたらしたものは過去の史學に對する斷片的批判でなく批判の體系である、それは正に一つの歴史觀によつて貫かれた美しき體系であることを就中「自然經濟と貨幣經濟」が示してゐる。唯だドブシュはランケなどと同じく具體的事實を離れて歴史觀だけを述べることをしてない、彼の歴史觀は常に現象把握を通して始めて理解するべきである。

右に擧げた數篇の他「ゲルマンの經濟狀態」、「中世初期の農奴解放と經濟」、「中世における人格と所有との自由保證の動機」、「中世初期における經濟精神と個人主義」、「墾太利國家の成立」などの夫々重要な諸論文に就いては茲に省略する。唯以上の紹介を通して知られるやうに、本書は大體において著者從來の學說に對する概括や部分的修補、強化の範圍に止まり、學說そのもの、根本には特記すべき轉回を示して居らない。その意味からは此の十年間はドブシュ史學における一つの「段階」を劃するとは曰ひ難いやうである。然しまたすべての論篇を通して印象されるものは、

圓熟の感よりも較ろ若々しき迫力である。

之は一體何を意味するといふべきであらうか。彼が此の十年間著しき轉回を遂げてゐないことは、とりも直さず彼の立場が動搖してゐないことを示してゐる。而も彼は圓熟してゐない、即ち彼の學問は今尙生長をやめない、彼は常に新たなる主張を抱いてゐるのである。

終りに、最近の十年間が著者の生涯にとつては最も暗黒な受難の時であり、本書は正にその中から生れ出たものであることは銘記せらるべきであらう。本書に収録された門弟の「自序傳補遺」によれば、彼は既に政府から退職を強制され、その研究室は閉鎖を命ぜられ、後任たるべき高弟パーツェルトはゼミナル指導を禁じられてゐる、それらは専ら政治的理由によるものであると謂ふ。然し弟子達は本書の冒頭に勇敢にも揚言してゐる、「我等のゼミナルは最早過去のものとなつてしまつた、だが我等同志の巨頭アルフォンス・ドブシュは不屈の精力のもとに活動を續けつゝ、ある、彼は前進する、牢固たる學徒魂の典型として、學問と人生における正義と眞理のための闘士として。」また同じく弟子達の語るところによればドブシュは獨逸では認められないに不拘、世界においては認められてゐる。フランス、イギリス、アメリカ及び日本において。特に日本の名が擧げられてゐることに對し、吾々は先賢諸氏に深く敬意を表さなくてはならぬ。(鈴木成高)